

福岡市早良区

# 重留C群第1号墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集

1983

福岡市教育委員会

早良区大字重留  
重留C群第1号墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集



1983年3月

福岡市教育委員会



## 序 文

市民の森として、市民に広く親しまれている油山はその裾野の丘陵部に数百ともいわれる数多くの古墳群をかかえ文化財関係者にも又親しまれています。福岡平野に面した油山丘陵一帯は遂次新たな開発に伴って古墳群の調査を行なってきたところであり、徐々に古墳時代の様相を解明しつつあります。

今回油山の西裾野の重留地区に北西産業株式会社が宅地造成される事に伴なって、重留古墳群の内1基を調査しました。調査の結果は古墳時代終末の六世紀末から七世紀始めの内容を示しています。その成果は当時の人々の死生感や宗教感をわたし達に示してくれ興味深いものです。

本調査を行なうにあたり、担当者が提示した調査費用や調査期間等種々の要請に対して、御理解と御協力をいただいた北西産業株式会社のみなさまに心よりお礼申し上げます。

又、調査に際し作業に忙く御参加願い御援助いただいた作業員のみな様に心より感謝申し上げる次第です。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

## 例 言

- 1 本書は民間の宅地造成の為の進入道路工事に伴い、福岡市教育委員会文化課が委託を受けて1982年度に実施した、発掘調査報告書である。
- 2 古墳の名称は福岡市文化財分布地図（西部1）によっている。
- 3 発掘調査は、埋文第2係二宮忠司、山崎龍雄が実施した。
- 4 本書に掲載した図は山崎が実測し製図を行った。
- 5 本書で使用した写真は山崎が撮影した。
- 6 本書の執筆、編集は山崎が行った。

## 本文目次

	頁
Iはじめ	1
1調査に至る経過	1
2調査の組織	1
3立地と歴史的環境	1
II調査の記録	4
1古墳の立地と現状	4
2墳丘	4
3横穴式石室	4
4出土遺物	10
5まとめ	12

## 挿図目次

Fig. 1重留古墳群周辺主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)	2
Fig. 2重留古墳群周辺地形図(縮尺1/10,000)	3
Fig. 3重留C群第1号墳地形図(縮尺1/300)	5
Fig. 4墳丘土層断面図(縮尺1/80)	6
Fig. 5墳丘遺存状況図(縮尺1/200)	7
Fig. 6地山整形状況図(縮尺1/200)	8
Fig. 7石室実測図(縮尺1/60)	9
Fig. 8閉塞部、及び石室基底面実測図(縮尺1/60)	10
Fig. 9土塁実測図(縮尺1/30)	11
Fig. 10出土遺物実測図(縮尺、土器と鉢器は1/3、その他1/2)	11

## 図版目次

PL. 1 (1)重留C群第1号墳遠景(西より) (2)調査前全景(四箇田圃地を臨む)	
PL. 2 (1)調査前全景(北より) (2)表土除去後全景(北より)	
PL. 3 (1)表土除去後全景(東より) (2)I、II区墳丘盛土除去後(北より)	
PL. 4 (1)石室全景(閉塞石除去前) (2)石室全景(閉塞石除去後)	
PL. 5 (1)玄室奥壁 (2)玄門 (3)玄室右壁 (4)玄室左壁	
PL. 6 (1)狭道右側壁 (2)狭道左側壁 (3)閉塞状況(玄室より) (4)同(上より)	
PL. 7 (1)土塁 (2)遺物出土状況 (3)出土遺物	

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

本墳は福岡市早良区大字重留字後谷に所在する。油山西麓には古来より多数の後期の古墳群の存在が知られている。本墳の所在する一帯も重留古墳群として以前より広く知られており、本墳も重留C群第1号墳として存在が確認されていた。

1981年より民間の宅地開発業社である北西産業が当古墳群の東側山中に宅地開発を行なっており、1982年にその工事用の進入路を文化課に無申請で西側の国道263号線から作る事となつた。その道路擁壁工事中に本墳の一部がかかり破壊を受けた。その事を市民より通報を受けた文化課は、同年4月26日に事前審査班を現地に派遣し、その破壊を確認した。そしてただちに原因者である北西産業と本墳の現状保存について協議を行なつた。本墳はすでに美濃部の大半が破壊を受け、崖面に残存する為石室崩壊の危険があり、又工事の設計変更も難しく、現状保存は不可能であった。以上の事から原因者負担で発掘調査を実施する事となつた。これを行うて文化課埋文第2係が同年7月6日より8月5日迄発掘調査を実施した。

## 2 調査の組織

調査委託 株式会社北西産業

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋藏文化財第2係

事務担当 岡嶋洋一

調査担当 二宮忠司、山崎龍雄

調査協力者 柴田大正、新原信浩、井口キミ子、石橋輝枝、牛尾二三子、倉光三保、倉光ユキエ、新町ナツ子、鍋山チズ子、藤タケ、柳浦八重子、山西人見、結城チカ子、横溝恵美子、米嶋ハツネ、浜池美佐子、吉岡友子

発掘調査においては渡辺和子氏に多大の協力を受けた。

## 3 立地と歴史的環境 (Fig. 1・2)

重留C群第1号墳は、福岡市早良区大字重留字後谷426-6に所在し、早良平野の東南隅、油山の西麓に位置している。

油山西麓には、古墳時代後期の群集墳が多数造営されており、南から荒平、三郎丸、重留、山崎の各古墳群が存在する。本墳の所在する重留古墳群も南から北へ延びる丘陵の斜面上に7支群28基の古墳が知られている。その他にも周辺には、昭和27年に鳥文鏡を出土した重留宇浦田の箱式石棺や塚塚等の古墳が知られている。<sup>11</sup>



本墳の所在する早良平野南部は、一昔前迄は純然とした農村地帯であったが、福岡市の政令指定都市昇格後、急激な都市化の波が押しよせ、周辺にも住宅公園の団地が出来るなど、あたりの様相も一変した。これに伴って、当然埋蔵文化財の発掘調査が増加し、遺跡の消滅を防ぐに、多くの考古学的重要な資料を提出してきている。西へ約2km離れた四箇塚では、純文前期から弥生時代、古墳時代の集落跡<sup>注1</sup>が、その北側の田村遺跡群では、弥生時代から中世に至る集落跡、水田跡が発掘調査されている。<sup>注2</sup>そして本墳の南側の三郎丸地区では、1980年に宅地造成に先立つ事前調査で、古墳時代後期の古墳を13基発掘調査している。更に1982年6月には、同地区宇浦川で、道路の擁壁工事に伴って弥生時代中期の墓棺墓7基を発掘調査している。このように重留周辺も都市化の進展につれて発掘調査が実施される機会が多くなってきた。今回のC群第1号墳の調査は、重留古墳群で初めての発掘調査であり、同古墳群の造営年代や性格についての何らかの指針をあたえるものであろう。

註1 福岡市教育委員会『有畠遺跡』福岡市有田古代集落遺跡第2次調査報告 1968年

註2 福岡市教育委員会『四箇塚近道跡調査報告書(4)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1981年

註3 福岡市教育委員会『田村遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982年



Fig. 2 重留古墳群周辺地形図 (縮尺1/10,000)

## II 調査の記録

### 1 古墳の立地と現状 (Fig. 2, 3)

本墳は、南から北へ伸びる尾根上の比較的緩やかな西側斜面に立地する。古墳の標高は65~67mの間にあり、北側に博多湾を臨む展望のよい場所に造営されている。本墳を含む重留C群は3基で構成されており1号墳はC群で一番北側の尾根上の先端に立地している。本墳は現状で周囲より1.0~1.5m程のこんもりとした高まりで、墳頂高は66.60mを測る。石室は天井石がすでなく、石室内部は流土で大半埋まっていた。発掘調査は古墳が崖面に立地する為、調査作業中の転落事故等の労働災害の防止をする為、まず防護柵を崖面に設置し調査を行なった。そして崖際から防護柵設置部分を1.5~2.0m程をベルト状に残し、その背面を発掘調査した。そして地山面が二次堆積層であった為、2トレンチを掘り下げ古墳以外の遺構の存在を調査したが遺構は存続しなかった。

### 2 墳丘

地山整形及び石室掘方 (Fig. 6) 本墳は等高線に直交して石室を構築する。地山整形は墳丘後半面の標高66mあたりから地山面を浅く削り出して墳丘基底面を水平になるようにしている。その痕跡である馬蹄形溝は古墳の背面南側と北側にわずかに見られるだけである。石室掘方は前半分を未調査で全体の形状はつかめないが、調査区では隅丸長方形を呈し、その最大幅3.1mを測る。石室スペースぎりぎりの大きさで掘削し、ほぼ直に掘り込んでいる。腰石裏込はしまっていない。石室基底面迄の深さは最深部で1mとかなり深い。

墳丘 (Fig. 4, 5) 墳丘盛土はかなり盛土の流出がみられ、遺存状態は不良である。盛土は旧地表面より盛り上げる。基盤面は赤褐色の花崗岩バイラン土であり、その土に堆積した赤褐色又は黄褐色粘質土の二次堆積が地山面となる。墳丘盛土は褐色土又は黄褐色土を主体とし、版築等の叩きしめは行なわれず、比較的難に積み上げている。墳丘平面形は不整な半円形を呈し、土層断面から推定した墳丘径は南北で約11mを測る。墳丘の残りは地山整形面よりも最も残りのよい所で1.4m程残る。

### 3 横穴式石室 (Fig. 7, 8)

本墳の埋葬施設は開口主軸方向をN-61°-Wを取り北西方向に開口する单室向抽型の横穴式石室である。石室遺存状況は、すでに道路工事により羨道部分が破壊されており不良であった。石室平面形はほぼ方形の玄室にやや左に聞く羨道が接続する。羨道部はわずかに腰石2~3石部分の長さを残すのみであった。石室遺存長は右壁で3.25m、左壁で3.45mを測る。尚

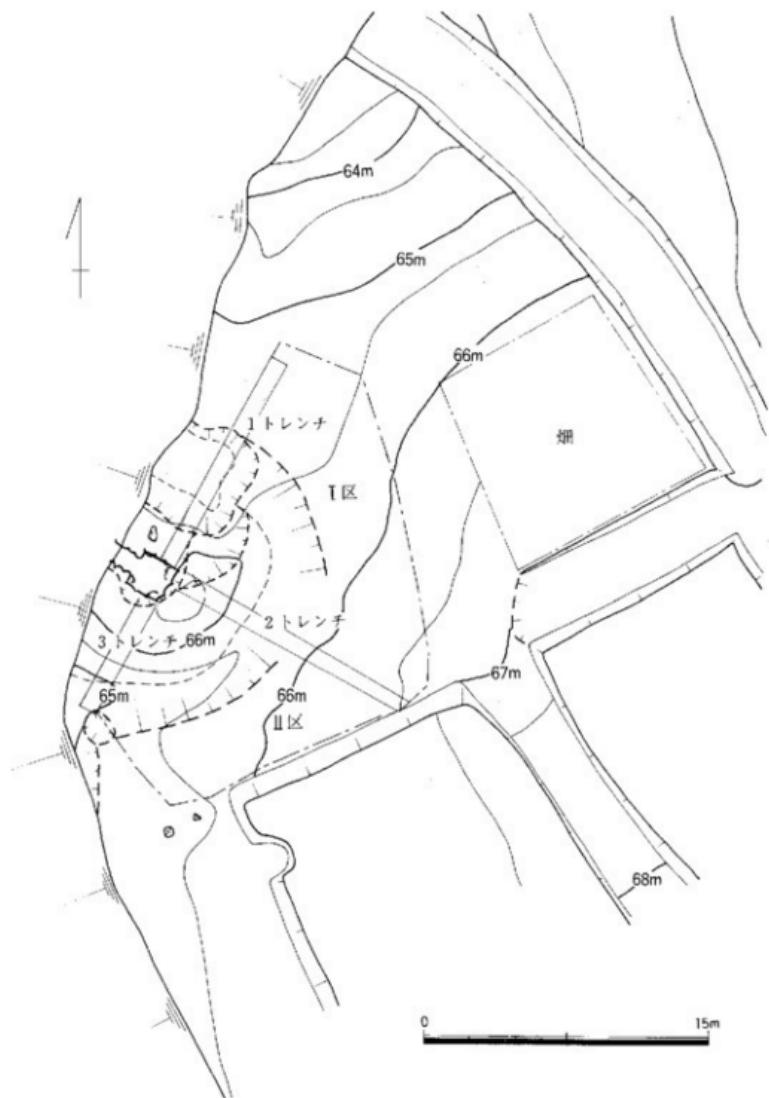


Fig. 3 重留 C群第1号墳地形図 (縮尺 1/300)

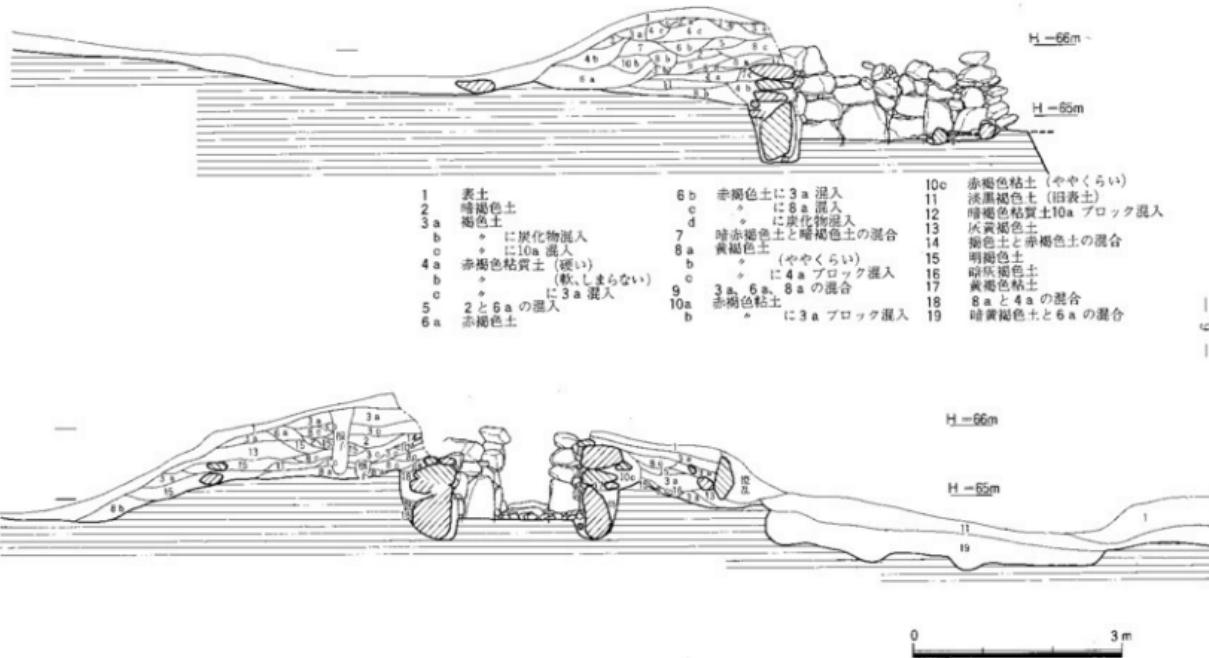


Fig. 4 境丘土層断面図 (縮尺 1/80)

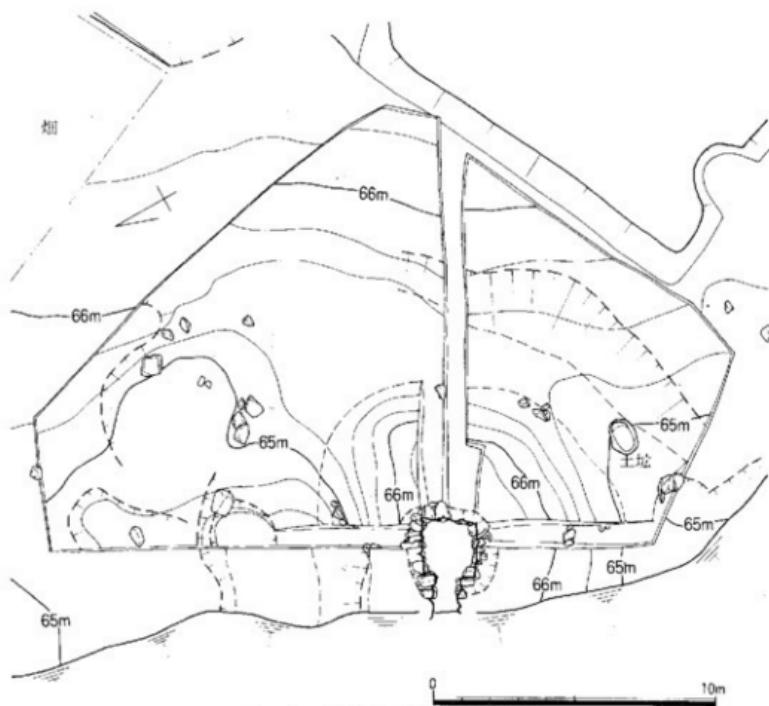


Fig. 5 墳丘遺存状況図 (縮尺1/200)

本墳で使用された石材はすべて花崗岩転石である。

**玄室** 奥壁幅 1.80 m、前幅 1.77 m、左壁長 2.0 m、右壁長 1.80 m を測り、ほぼ方形の平面プランを呈す。壁石の遺存状況は各壁面共腰石より 3 段程度残るのみで、やや不良である。各壁面の構成はほぼ共通する。各壁面共腰石は 3 石である。長さ 60 ~ 80 cm 位の転石を横位置に深さ 30 cm 程掘り下げた腰石掘方内に置き、各腰石間に根石をからめて安定を計っている。腰石より上は、おおよそ上下、左右に目地が通る重箱積み技法により積み上げ、大きくて 40 ~ 60 cm 位の転石を横位置に積みあける。そして各壁石の隙間には更に小さな 10 ~ 20 cm の石材をつめて補強している。

**玄門部** は右袖石幅 0.53 m、左袖石幅 0.44 m を測り、高さ 60 cm 程の石材を機位置に置き、他の側壁と高さをそろえるように上に石材を積み上げている。

床面は搅乱がひどく、敷石は左袖石隅角にわずかに残る程度である。

**羨道** すでに破壊を受け遺存状況は良くない。現存長は右側羨道が 1.35 m、左側羨道が 1.70 m

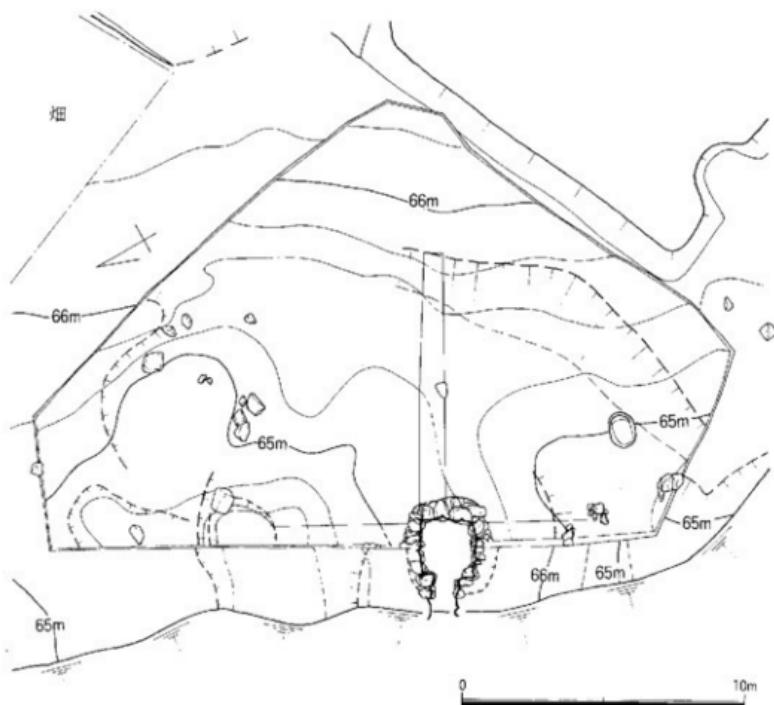


Fig. 6 地山整形状況図 (縮尺 1/200)

を測り、狭道幅は玄門部で 0.8 m を測る。狭道部両側壁の構成は第 1 棚石迄は玄室と同様に左右、上下に目地が通る重箱積み技法であるが、それより開口部側はレンガ積みに近く貼石的である。石材は、玄室よりも全体にかなり小ぶりの転石を使用している。床面には棚石を二重に配置する。第 2 棚石は玄門間にあり、第 1 棚石はそれより 60 cm 程間口部寄りに位置する。両棚石共、長さ 60 cm、幅 25 cm 程の細長い石材を使用し、その両側には磨石との空間をつめる為の 15 ~ 30 cm 程度の転石を補充している。両棚石間にはこぶし大から人頭大の大きさの転石を敷石として使用している。第 1 棚石より開口部にかけては床面に敷石は存在しない。

**閉塞施設** (Fig. 8) 閉塞施設は第 1 棚石上に見られた。第 1 棚石上 80 cm の高さ迄閉塞施設は遺存し残りは比較的良好である。細長い花崗岩転石を使用し、玄室に向う面をほぼ直にそろえてつみあげる。下程大きく土にいく程小さい石材を使用している。

**その他の施設** II 区周溝内で土壙、そして 3 ドレンチ内で列石の一部らしきものを確認した。

**土塙** (Fig. 9) 長軸方向を略北東に取る。平面プランは隅丸方形、断面は船底形を呈す。

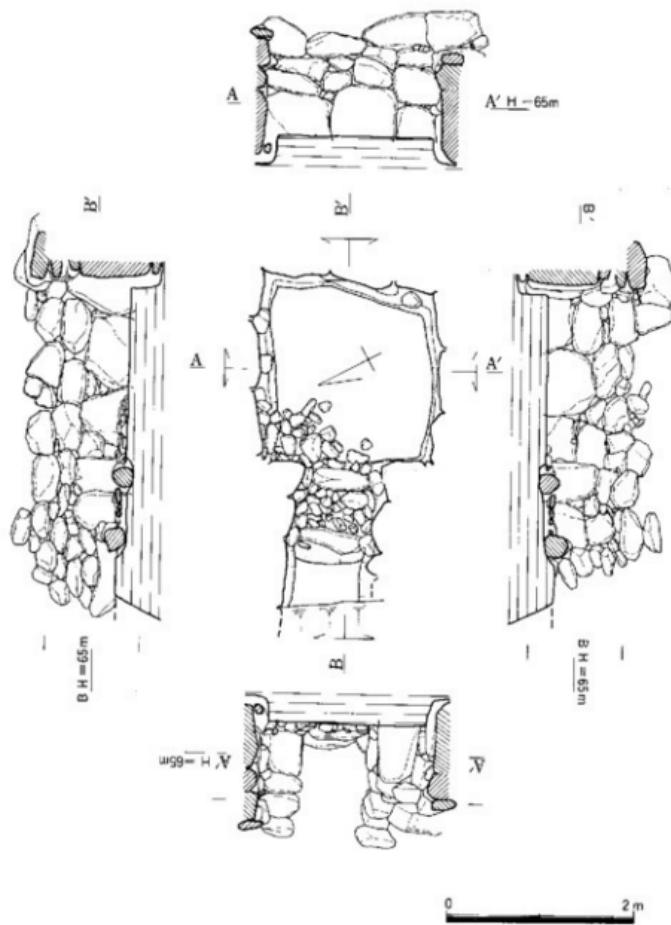


Fig. 7 石室実測図 (縮尺1/60)

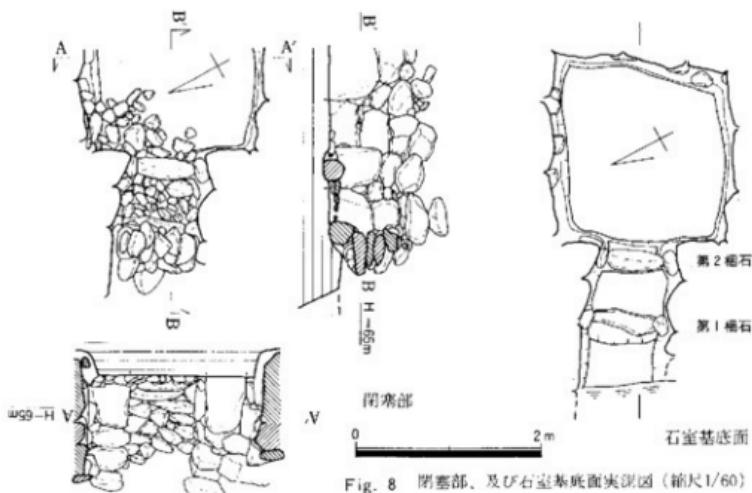


Fig. 8 閉塞部、及び石室基底面実測図（縮尺1/60）

長軸長126 cm、短軸長88 cm、深さ40 cmを測る。覆土は暗灰褐色土を主体とし炭化物・焼土を多量に混入する。又周壁は焼成を受け赤く焼けていた。出土遺物はない。広石古墳群や徳永アラタ古墳群で検出された墓前祭祀に伴う土塚と考えられる。

列石 墳丘の前半分が未調査なので明確な列石は検出出来なかった。しかし3トレンチ内で人頭大の列石らしき転石が確認されており、列石が存在する可能性は強い。

#### 4 出土遺物 (Fig. 10)

すでに盗掘を受け、又狭道半分が工事により破壊されている為、遺物の出土は少ない。主に石室玄室流入土、狭道閉塞部床面、同墳丘北側裾部より、須恵器の壺、土師器の長頸壺、線、鉄錆、刀子、白玉等が出土した。原位置を保つものは狭道玄門部床面の線、長頸壺、鉄錆、刀子のみである。他には石室流入土より中世の土師皿、鐵錆が出土した。遺物は細片が多く、図示し得るものは少ない。

##### 土師器 (Fig. 10-1~3)

長頸壺 (1) 狹道左袖右隅より出土した完形品である。口径5.4 cm、器高9.6 cm、最大胸径6.1 cmを測る。やや扁平気味な球形の胴部から頸部が少し内窓気味に開きながら伸び、口縁端部を直立気味におさめる。胴部下半から底部は手持ちヘラ削りで粗く調整した後、ナデ仕上げを行なう。頸部から口縁内外面はヨコナナド調整を行なう。胴部内面は調整不明。胎土は精選されており、焼成は普通、色調は淡褐色を呈す。

甌 (2) 1と同場所から出土。ほぼ完形である。口径7.8 cm、器高8.6 cm、最大胸径

6.9 cm を測る。底部は平坦で、扁平気味の胴部より外反氣味に開く頸部がつく。そして口縁部は内弯気味に屈折し口端部を丸くおさめる。胴部中央と肩部には幅 5 mm の沈線が 2 条めぐり、また直径 0.5 cm の孔が外側より焼成前に穿たれる。

その上には長さ 1 cm の鋸歯状構目を施す。調整は胴部中央より下は、幅 1 mm 程度のカキ目を幅 2 cm の範囲に加え、その下はナデの雑な仕上げである。頸部内外面は横ナデ調整である。胎土は細い砂粒を少量混入する。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。

高杯（3）杯部片である。玄室流入土より出土。復元口径 13.0 cm を測る。口縁部はやや外反氣味に開き、端部を丸くおさめる。体部と口縁部の間には一つの明瞭な段を有する。器壁はかなり摩滅するが横ナデ調整である。内面に丹塗の痕跡が残る。胎土は砂粒を少量含むが良好。焼成はややあまい。色調は明褐色を呈する。

#### 鉄製品・その他

鉄鎌（4）第 2 桜石床面上出土。尖根式に属し、身は柳葉状で茎は断面方形を呈する。基端部を欠失するが、ほぼ完形で最大長 15.9 cm を測る。茎に部分的に木質が残る。

刀子（5・6）2 点出土。5 は鉄鎌と一緒に、6 は閉塞施設外側の左壁腰石隙で検出した。

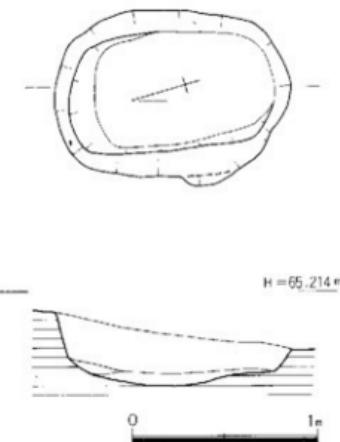


Fig. 9 土地実測図 (縮尺1/30)

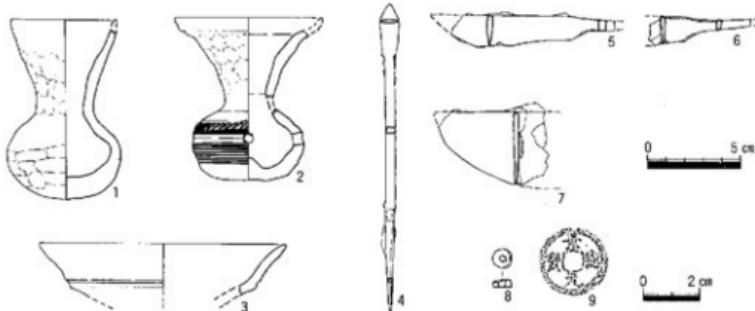


Fig. 10 出土遺物実測図 (縮尺、土器と鉄器は1/3、その他1/2)

5は身と茎の破片であり、現存長8.7cm、身幅は1.7cm、身厚は0.2cmを測る。6は刃部のき先と茎の端部を欠失する。現存長5.5cmを測る。5・6共全体に腐蝕がひどい。

不明鉄製品（7）4・5と同位置より出土した。最大現存長6.1cm、最大幅4.0cm、厚さ0.4cmを測る。一辺が直線、一辺が弧状を呈す。腐蝕が著しく、表面はかなり剥離する。小片なので全体の形状はつかみ得ないが、直刀のき先片と思われる。

白玉（8）玄室流入土より1点出土した。滑石製の白玉である。直径0.65cm、孔径0.25cm、厚さ0.2cmを測る。色調は灰色を呈す。

銅鏡（9）玄室流入土より出土した。腐蝕が著しいが、北宋真宗時代（1004年）に鋳造された景徳元宝である。外径2.4cm、孔径0.6cmを測る。

## 5 ま と め

以上調査の概要について述べたが、それを項目ごとに要約し若干の考察を加えまとめとする。

1. 本墳は北西方向に開口する単室両袖型の横穴式石室を主体とする円墳である。墳丘盛土は旧地表面より盛り上げており、墳丘径は南北方向で約11m、現存墳丘高は地山面より最大1.4mを測る。

2. 石室の平面形は、1.8m×1.8mの略方形を呈する玄室に幅0.8mを測る狭い狭道が接続する。しかし狭道は約半分程工事によって破壊されており、石室全長は不明である。墳丘規模から考えて、石室全長は最大でも6m前後と考えられる。石室の平面企画について考えると、使用尺度は高麗尺（約35cm）が妥当と思われる。玄室奥壁中央から第2樋右中心迄2.14m、第2樋右中心から第1樋右中心迄は0.69mを測る。それぞれに適用すると6尺と2尺になり、その比は3対1となる。

3. 壁体の構築方法は重積積み技法を用いるが、力石や壁石の持送りは見られない。又石室掘方は隅丸方形を呈し、石室ぎりぎりの広さで構築している。

4. 出土遺物は少ない。特記すべき物として土師器の長頸壺と甌が出土している。特に甌は須恵器の形態を模倣したものである。いずれも器高は10cmに満たず、実用に適するとは思われない。儀礼用のミニチュア土器であろうか。

5. 古墳の築造年代は出土遺物が少ないので、具体的な年代決定は難しい。しかし原位置を保った状態で出土した甌の形態が小田富士雄氏編年の中期にはほぼ相当する事、及び方形の玄室平面形を持つ横穴式石室の形態から判断して6世紀末から7世紀初が考えられる。重留古墳群のすぐ南側山麓に所在し、1980年に発掘調査された三郎丸古墳群の時期は、6世紀後半から7世紀前半迄であるという。本墳もほぼ同時期並に平行して築造されたものと考えられる。

今回の調査は重留古墳群で実施された最初の調査であり、その調査成果は重留古墳群の全容を解明するにはまだまだ不十分なものである。しかし今回の調査成果は今後の重留古墳群の調査研究に何らかの方針を与えるものと確信する。

註4 福岡市教育委員会「庄古占墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年

註5 福岡市教育委員会「德永アラタ古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 1980年

註6 調査担当者の福岡市教委の二宮忠司氏のご教授による。

# 図 版



(1) 重留C群第1号墳遠景（西より）



(2) 調査前全景（四箇田圃地を臨む）



(1) 調査前全景（北より）



(2) 表土除去後全景（北より）



(1) 表土除去後全景（東より）



(2) I、II区堆丘盛土除去後（北より）



(1) 石室全景（閉塞石除去前）



(2) 石室全景（閉塞石除去後）



(1) 玄室側壁



(2) 玄門



(3) 玄室右壁



(4) 玄室左壁



(1) 横道石側壁



(2) 横道左側壁



(3) 開塞状況（玄室より）



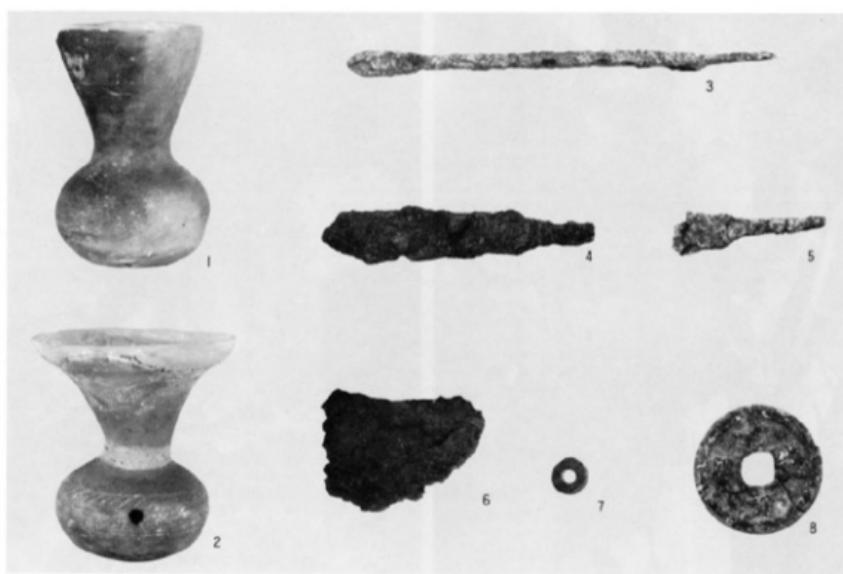
(4) 開塞状況（上より）



(1) 土塊



(2) 遺物出土狀況



(3) 出土遺物

福岡市早良区

重留C群第1号墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集

1983年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 祥文社印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南四丁目15-17